LOVE

メキシコシティのストリートチルドレン

工藤　律子

くどう・りつこ

1963年、大阪生まれ。フリージャーナリスト。東京外国語大学スペイン語科在学中にメキシコに留学。同大大学院でメキシコ低所得者層の生活改善運動を研究し、91年、修了。著書に『とんでごらん!――ストリートチルドレンと過ごした夏』（JULA出版局）、『リゴベルタの村』（講談社）。

ペソ大暴落

昨年末から今年にかけて、珍しく日本の新聞に“メキシコ”の文字が飛び交った。ペソ大暴落の報道だ。遠くアジアの株式市場にまで影響を及ぼしたこの出来事に、普段あまり中南米には関心のない日本人も、「メキシコは大変なんだなあ」と感じたに違いない。

当のメキシコ人はというと、すでに「大変だ」と言っていられる次元をこえ、「いい加減にしてくれ!」と、無策な政府に怒りをぶつけ始めている。それほど人々の暮らしは、苦しい状況に追い込まれているのだ。それは単に通貨が下落してインフレが進み、より多くの人が失業し、貧しい生活を強いられていることを意味しているだけではなく、未来を担う子どもたちの心にまで、より重い病をもたらしている――

ストリートチルドレン

「もうあんな家、嫌になったの」

十三歳の少女・ノエミは、久しぶりに会った私に、真剣な表情でそう言った。彼女は以前、ここメキシコシティの長距離バスターミナルで知り合ったストリートチルドレンの一人だ。といっても、当時の彼女は、家を出て街頭生活をする“本物のストリートチルドレン”ではなく、“自宅通い”だった。両親がよく暴力をふるうため、時々二つ年上の姉と共に気ままな街頭暮らしに身を投じては、そこに“避難所”を見いだしていたのだ。ほかの子たちと違い、チェモ（シンナー替わりに吸う靴用接着剤）を吸わず、家に帰ってはきちんと食事や着替えをして来る彼女たちは、顔色が良く、小綺麗な服装をしていた。

ところが再会したノエミは、すっかり痩せ細り、薄汚れたTシャツとズボンに身を包んでいた。聞くと、両親の暴力に耐えきれなくなって家出した、と言う。

「じゃあ、もう家には帰らないの?」鈍く光る瞳を見つめながら尋ねると、ノエミは、

「ええ。今はこの通り、彼と一緒にトロリーバスの中で、芸をして暮らしてるのよ」

と、二つ年上のボーイフレンドと肩を組んで、ピエロのメイクを

ノエミとボーイフレンド

した顔をほころばせた。

すさむ大人社会

人口約二千万という世界一の大都市・メキシコシティには、ノエミのようなストリートチルドレンが、数万人いると言われている。その多くは、家庭での暴力やいざこざを逃れてきた子どもたちだ。

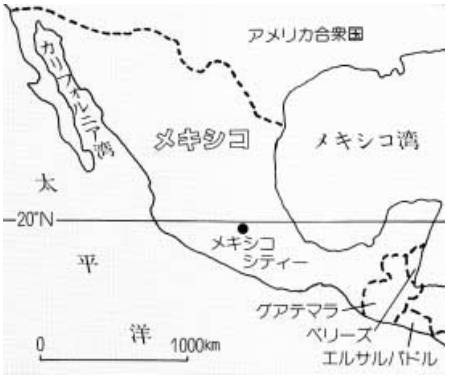
メキシコでは、今世紀後半、急速な近代化が進むなか、農業の大規模化・機械化や都市への産業集中によって土地や職を失った農民が、大量に首都メキシコシティに流れ込んだ。結果、雇用や住宅の事情が人口の増加に対応しきれなくなり、多くの失業者と無数のスラムを生み出した。大人たちの多くは、職もなく、その日暮らしが続くなか、焦燥感と絶望感に襲われ、酒や麻薬、暴力へと走った。そうやって自分の気持ちを一時的に晴らしたのだが、代償として、家族の、特に子どもたちの心を傷つけてしまった。

荒廃した大人社会のなかで、子どもたちは、段々と家庭での居場所を失い、“ストリート”に救いを求めるようになっていった。

ノエミの暮らし

夕闇が迫る頃、私はノエミとボーイフレンドに誘われ、彼らの“家”を訪ねた。そこは、街の中心部にある瓦礫だらけの二階建ての廃屋だった。二階の一室だけがきれいに片付けられ、どこかで拾い集めてきたらしい使い古しのソファとベッドが置かれていた。

「ああ、いらっしゃい……」



自分たちの“家”でくつろぐノエミ（中央）とボーイフレンド、チェモを吸う姉（右）（写真：篠田有史）

部屋に入ると、ベッドに寝そべっていたノエミの姉が、右手を延ばしてきた。握手をしながらこちらに向ける視線が、やけにフラついている。と、左手に握ったジュースの空きビンから、チェモの臭いが漂ってきた。

――とうとうチェモも始めたんだ……――

私は目の前の光景に、愕然とした。彼女たちは、“本物”になっていたのただ。

ノエミは、この“家”でボーイフレンドと姉、それに同年代の少年一人を加えた計四人の子どもで暮らしていた。彼女たちは、生活費が必要な時はトロリーバスのなかでピエロの演技をやって稼ぎ、あとの時間は仲間とチェモを吸ったり、雑談したりして過ごしていた。辛い思い出を忘れ、空腹も忘れ去るためにチェモを吸い続ける姿は、まるで思考することを拒否しているかのようだった。

「構ってほしい」

「買い物行こうよ」

突然、ポケットから小銭を引っ張りだしたノエミが、私に声をかけた。彼女は、私が返事をする間もなく、すっくと立ち上がり、壁に立てかけてあったろうそくを手に取ると、明かりで先導するように暗い階段を降りていった。それから、封鎖されている門の隙間をすり抜け、外へ出ると、一ブロック行ったところの雑貨屋で、スナック菓子を数袋買った。

部屋へ帰ってきてソファに座ると、ノエミは私にお菓子の袋をひとつ差し出した。

「いいわよ、私は。みんなで食べたら?」

そう言って袋を返そうとすると、

「わたしたちの分はほかにあるから、いいの」

と、今度は彼女が私に袋を返す。買い物を待っていたはずのほかの三人も、お菓子には意外と無関心で、チェモを吸うことに夢中だ。

――お菓子は、私をもてなすためにだけ買いに行ったんだ――

店で代金を払おうとすると、「いらないから」と受け取らなかったノエミを思い出し、私は胸を締めつけられる思いがした。

その夜、一緒にいる間じゅう、ノエミは私の靴下のデザインを褒めてみたり、今度いつ遊びにくるか尋ねてみたりと、何とかして私の関心を引こうとしていた。その姿はまるで、親に構ってもらいたくて仕方がない幼子のようだった。

――みんな、愛情を探しているんだ……――

帰り際、淋しそうな目で、私を見送るノエミの眼差しのなかに、私は微かな希望を見いだそうともがく、小さな魂の叫びのようなものを感じた。

子どもは地球の鏡

メキシコのような貧しい国々を中心に、ストリートチルドレンは今も増え続け、すさんだ大人社会がもたらした心の病を抱えたまま、街頭暮らしのなかで命を縮めている。彼らを救える人は?方法は?――そう考える時、私たちはしばしば無力感に囚われる。

しかし、よく考えると、一人一人ができること、なすべきことはあるのだ。それはまず、大人社会のなかの愛情を絶やさないこと。メキシコ人であれ、日本人であれ、私たちが皆、家庭、地域、職場など、あらゆる場所で、互いに理解と愛情をもって接し、違いや境界を越えて協力しあえば、自ずと社会のなかに愛情が根づき、子どもたちの心も安らぐのではないか。

「子どもは地球の鏡」――地球社会の未来を担う子どもを救うためには、現在を担う私たちが生き方を改めなければならない。